

9月19日（金）

Ratu Boko

人文社会科学部 2 年

概要

Ratu Boko は、8～9 世紀に栄えた古代ジャワ王国の遺跡の一つであり、1790 年にオランダ人によって発見された。海拔 196m に位置し、16 ヘクタールの敷地内には宮殿や寺院が点在している。この遺跡からはムラピ山、プランバナナ寺院を望むことができる。階段を登ることで、3 層の台地に分けられている。建物は周辺の山でとれる安山岩で造られており、復元する際に新しい岩を用いるときにも安山岩が使用されている。

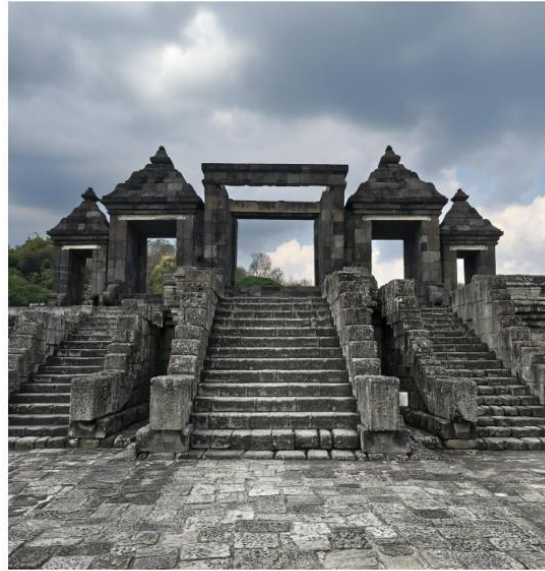
760 年から 780 年にかけて Saliendra 王朝の統治者であった Rakai Panangkaran が辞任した後に、Ratu Boko を建設したと考えられている。Ratu Boko とは、民間伝承に出てくる王様の名前である。発掘された資料などから、仏教とヒンドゥー教が共存、または融合していたのではないかと考えられている。



Main Gate of Boko

入口から進んでいくとまず復元された門が見えてくる。門までの道の中心は新しく運んできた安山岩を用いたものだが、その両端は発掘されたものを用いている。門にはバロンという獅子の守り神が彫られている。階段を登って 2 層目の台地にある 3 つの入口がある門を抜けると、また階段があり 3 層目の台地の入口として、同じように 3 つの入口とその

左右に小さめの2つの入口がある門が一直線上に存在する。この先には、広大な土地が広がっているが、復元が終わったのは門だけであるため、基本的に建物はなく、土台だけあるものがほとんどである。



Penbakaran 寺院

門を通った先にある3層目の台地の左側には、約4メートルの高さがある階段と土台部分のみが残ってその中央には四角の穴があいている。遺灰が見つかったことから、火葬場として用いられたと考えられている。井戸があり、その大きさは2.30m×1.80mで、乾季の水深は約2mである。かつて井戸の水は寺院での宗教儀式に使用されており、使用する人に幸運をもたらすとされていた。



Paseban

門の右側へ進むと、いくつかの四角に囲まれた石の床だけが残っている。柱を支えるための穴が開いた、柱頭として機能する unpak と呼ばれる石がいくつかあり、建物の土台として機能していたと考えられる。これらの周囲に神聖な要素が見られなかったことから、世俗的な建物として機能していたと考えられている。



Pendopo (謁見の間)

安山岩の石壁に囲まれた四角の遺跡で、北、西、南側に小さなパドゥラクサの入口門がある。中央には、2つの独立した石の土台があり、南側のものは北側のものよりも小さい。これらは木造建築の土台と床の役割を果たしており、unpak または石がいくつかあり、柱を支えていた。柱、壁、屋根は木材などの腐りやすい材料で作られていたため、どれも残っていないため、石の土台だけが残ったとされる。現在、一部にビニールがかかっており、おそらくメンテナンスがされているとのことだった。南側には、3つの小さな祠があり、その前には四角の穴が空いている。この遺跡群の宗教的な側面を象徴するものの一つである。



修行洞窟

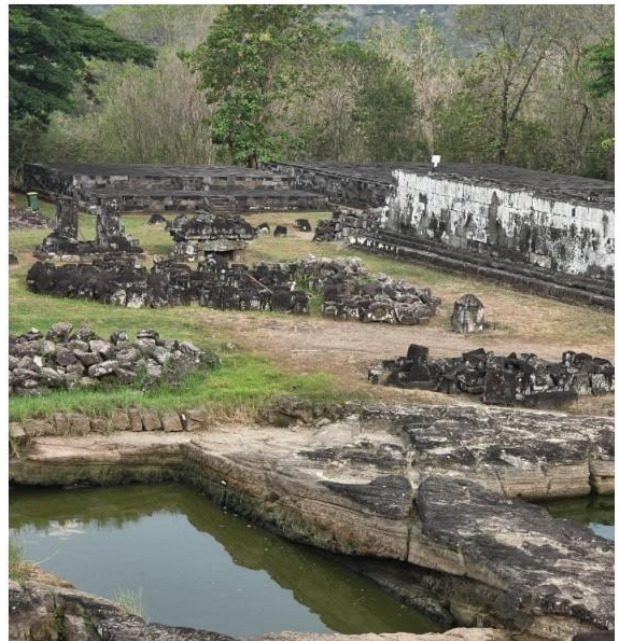
Pendopo の北側の他の遺跡から隔離された場所に 2 つの洞窟がある。上の洞窟はグア・ラナン（男の洞窟）、下の洞窟はグア・ワドン（女の洞窟）と呼ばれています。グア・ラナンの前には池と 3 体の彫像がある。この洞窟はおそらく瞑想の場として機能していた。



(引用:https://en.m.wikipedia.org/wiki/Ratu_Boko)

Kaputren と沐浴場

Pendopo のとなりにある Kaputren は王様の側室の宮殿である。入口の門や土台はある程度見ついているが、復元されてはいない。沐浴場には、大きめの四角の浴槽と小さめの丸い浴槽がある。その数から、側室の多さがうかがえる。



まとめ

Ratu Boko は、仏教とヒンドゥー教が共存、または融合していた場所であることが調査により明らかになっている。敷地内の多くの建物が復元されておらず、土台のみであり、調査や工事がされていることがわかった。すでに壊れていてどのような建物だったのかほぼ分からないために復元が難しいという点は、縄文遺跡群や平泉の世界遺産と同様の遺跡のオーセンティシティをめぐる問題だと考える。

参考文献

https://en.m.wikipedia.org/wiki/Ratu_Boko